

花、里、民家、

さようなら

私の好きだった

風景

佐野昌弘

第五章

稔り

神無月（10月） 霜月（11月）

遠くの山が、うっすらと白い冠を被るころ、
民家は得も言われぬ艶やかな衣を纏います。

赤、朱、真紅、黄、茶、そして黄金色、
手持ちの絵の具では描ききれない豊富な色に
飾られ、民家が最も絵になる季節です。

透き通った青い空、夕日に輝くすすきの穂、
一面の枯れ落ち葉、高い梢の木守柿、
どれも民家を絵にしてくれます。



岡山加茂町物見

葺き民家

秋色の柿の実

良く似合う



新潟松之山

黄金色の稲束が宙を舞う

明るい掛け声、笑い声

今年も豊作



京都左京区広河原

昭和45年頃、鞍馬街道は鞍馬の町を外れるとすぐ未舗装のガタガタ道であった。昔は木から落ちてくる山蛭を除ける為、山笠と合羽を着なければならなかったと言われる、深い林が続く九十九折の山道を車でも30分、やがてパッと明るくなった所が花背峠、遠く福井との県境の山々まで開けて見晴らせる、大悲山、能見を過ぎると谷川に沿った崖のくねくね道、冬 積雪のとき来て「あんた、命知らずだね」と言われたことがあった、

広河原は桂川の上流、早稲谷川が大きくカーブしている谷に点在する小さな集落、遙々やっと辿り着いたと這いえ、京都市内、左京区、広河原・立派な市内である、最近まで道は行き止まりの袋地で、通り抜ける事も無く、悪路で外部とは遮断されていた為に自然が手付かず残されて来たのだと思われる。無我夢中で広河原の民家を撮影して数時間、ふと気が付くと集落の最奥、これから先は営林署の車以外誰も入らない山道の入り口の脇に小さな喫茶店と書いた小屋があり、近づいて見ると、御用の方は前の家に声をかけて下さいと張り紙があった。

大して期待もせず声を掛けると、

奥から「ハイ」と明るい声で出てきた人を見て、びっくり、普段着だがこのまま銀座を歩かせても、不自然ないどころか、一段と光る様な超美人。悪路を長時間走ってたどり着いた、別天地には全く不釣り合い。狐に摘まれた様な状態でコーヒーを入れてもらうとは本物、抜群の味と香り。話して見ると当時私が事務所を開いていた、新宿の或る街から最近お嫁に来たのだそうだ、何日に一人来るか、来ないかの客が同じ町内から来た偶然に、町内のお菓子や、すし屋、から八百屋の話ですっかり盛り上がった。



京都左京区広河原

広河原は僅かな高度の差か、気象の関係か、周りの美山町、京北、朽木では見られない、本当に真っ赤に染まる紅葉が民家を飾ってくれる、その魅力に魅かれ二十年以上、コーヒーを飲みに通い続けている。行き止まりの様だった山道も佐々里峠を越えて美山町とつながり、アプローチもすっかり舗装され、萱葺き民家の数は少し減ったとは言え、広河原の紅葉の美しさは変わって居ない。

ママさんは今も綺麗だ。



侘



京都広沢ノ池

寂

ご感想、お待ちしております。

佐野昌弘

masahiro.s@daccs